

『説文解字』の世界：漢字学の濫觴

講演者： **史傑鵬 氏**

（東京大学東洋文化研究所訪問研究者）

日時： 2018年6月9日（土）13時00分～14時30分

場所： 関西大学 千里山キャンパス 以文館4階 セミナースペース



史傑鵬、1971年生まれ、中国江西省南昌市出身。北京大学、北京師範大学にて、文字学専攻、文学博士。主な研究領域は、古文字学、訓詁学、語源学及び上古（秦漢）古文献学。これまでに学術論文を50篇以上発表している。助教授として北京師範大学にて長らく教鞭を執ったのち、現在は東京大学東洋文化研究所の訪問研究者である。

『説文解字』（せつもんかいじ）は、中国最古の部首別漢字字書。後漢の学者許慎（きょしん）の著で、西暦100年に成立。本文14篇、序1篇の15篇から成り、小篆の見出し字を9353字収録している。許慎は、漢字を540の部首に分けて体系付け、その成り立ちを解説し、字の本義を記している。有名な漢字「六書」の学説もこの本から始まり、『説文解字』は紛れもなく漢字学の濫觴である。

『説文解字』に関する研究は、清代に最も大きな成果を上げた。19世紀末の甲骨文字の出土により、研究が更に深められた。この講演では、『説文解字』の著者、成立を紹介する他に、清代「小学」の研究成果を振り返り、特にその研究方法について話したい。また『説文解字』の知識は、今日、国外の学習者を含め、我々の漢字学習にどのような示唆を与えられるかについても考えてみる。講演は中国語による。